



■ セラチア菌院内感染事故から20年 ■

教訓を風化させず、予防の大切さ学ぶ



記念講演講師の武内一先生

医療介護安全大会は、耳原総合病院でのセラチア菌院内感染事故の教訓を風化させないために、事故の翌年から毎年7月に開催しています。「国内外のさまざまな考え方やとりくみなど新しい視点を学ぶ」「各職場で検討し、努力や工夫している実践を法人全体で交流する」ことを目的に「安全」と「感染」の問題を交互にとりあげていきます。

事故から20年目の節目を迎える今年は、当時放映されたNHKクローズアップ現代のDVDを視聴し、あらためてお亡くなりになられた方への黙祷を捧げました。

今回は繰り返される麻疹・風疹の問題とワクチンに関する基本的な知識について学び、HPH活動にもつなげていきたいと一人の一生とワクチンと感染対策は予防から「ワクチン」に開く。開会に先立ち、耳原総合病院感染制御室長・木野茂生副院長から2018年度の感染対策活動報告、耳原総合病院医療安全管理室長・河原林正敏副院長より医療介護安全のまとめが報告されました。

事業所からは、耳原総合病院と老健みみはらでのインフルエンザ対策のとりくみについて報告を受けました。毎年、アウトブレイク

第19回 みみはらグループ医療介護安全大会

7月20日 堺市総合福祉会館で開催



熱心に聴きいる324人の参加者



記念講演は、佛教大学社会福祉学部教授で小児科医の武内一先生から、「病気を予防するためのワクチンの大切さ」について話した。

麻疹・風疹の大流行の背景にある問題や合併症について詳しく話され、「ワクチンは副作用が怖いし、自然に病気になる方がいい

のでは?」「ワクチンって本当に効果があるの?」といったQ&Aも交えながらの、わかりやすい学びの場となりました。

今回の学習を機会に、医療従事者としてどのような活動を進める必要があるのか考え、予防の大切さを広めたいと思います。

(医療介護安全大会 実行委員会事務局)

今月号より「みみはらグループ」で働く人を紹介する「新シリーズ」をスタートします。第1回は同仁会副専務の渡邊さん。プライベートの過ごし方も交えてインタビューにお答えいただきました。

—今の仕事を選んだきっかけは?—

儲け主義の会社や営業の仕事は向いていないな、と思いつつ民医連や生協を中心に探っていて同仁会の募集が目についたのがきっかけです。

—この仕事をしていて感じている「やり甲斐」は何ですか?—

これまで医局や診療所で働いてきました。特に診療所では患者さんからの色々な相談にのって大変なこともありましたが「耳原があつて良かった」と言われると、その一員であることに誇りを感じました。

—友の会や患者・利用者さんへの期待や伝えたい思いは?—

昔の耳原と比較されることもあり現在の厳しい医療介護制度の中で患者・利用者を守り、職員を守り、そして病院を存続させていくために「もがきながら」前に進むつもりでいる耳原を支えてください。

—自分にとって「みみはら」とは?—

ずいぶん長く働かせてもらっていますが、耳原に就職したことを後悔はしていません。

儲けることが仕事ではないの思いから、同仁会に就職された渡邊副専務。本部責任者という大きな任務がありストレスも多いと思いますが、美味しいお酒をのんだり、愛犬のことがちゃん(トイプードル)と一緒に過ごす時間です。フレッシュされているそうです。

休日の道の駅めぐりも楽しいと仰っていました。

最後に、自分自身を大切に、同時に「人はそれぞれ」と、相手を理解することを心掛けていたと話していただきました。

医療の現場での事務の役割は、患者さん・利用者さんが支払う費用の計算・国へ診療報酬を請求する業務・医師や看護師へ患者さんや利用者さんの情報や想いを伝えるなど、たくさんあります。一般の会社の事務と違って、職種や立場を越えた人と人をつなぐ役割もあり、「人はそれぞれ」と思いやる気持ちは大切だな、と感じました。

(同仁会報編集部)

「人はそれぞれ」と相手を理解し自分自身も大切に

みみはら 十人十色

シリーズ
みみはらの人 ①



わたなべ たかはる
渡邊 孝晴さん
同仁会 副専務理事

1962年 岡山県出身
同仁会へは1984年入職。耳原総合病院、診療所などを経験し、現在は同仁会本部事務局全体、各診療所、事務職全体を統括。労働組合との交渉窓口としての役割も担っている。